

# 不苦心談

森鷗外

青空文庫



ファウストを訳した時の苦心を話すことを、東亜之光の編者に勧められた。然るに私は余り苦心していない。少くも話の種にする程、苦心していない。こう云うのがえらがるのでないことは勿論である。また過誤のあつた時、分疏ぶんそをするために予め地をなして置くのでもない。これは私の性質と境遇とから生じた事実である。あるいはそれではギョオテに済むまいと諂せめられるかも知れない。しかしこれまで舞台に上されるファウストを日本語で書いた人もなく、またそう云う人が近い将来に出そうでもなかったの

で、無謀かは知らぬが、私とその瀬踏をして見た。これは苦勞性の人には出来ぬ事かも知れない。私の性質と境遇とが、却て比較的短日月の間にそれをさせたのだと云つても好いかも知れない。

## 二

ファウストの善本は無論ゾフィンアウスガアベである。私はそれを持つている。然るに私は零碎の時間を利用して訳するのだから、三冊物を持ち歩くことが出来ない。それでハルナツク本から訳した。ただ疑わしい処をゾフィンアウスガアベで調べて見ただけである。コンメンタルの類も多少持つている。それも一

々読んで置いて訳したのではない。ただ疑わしい処をコンメンタルで調べて見ただけである。こう云う方法に従ったのは、単に手数を省こうとしたのではなかった。手を抜こうとしたのではなかった。私は当初から原文を素直に読んで、その時の感じを直写しようと思っていたのである。

### 三

ファウストの訳本は最初高橋五郎君のが出た。次いで私のを印刷しているうちに、町井正路君のが出た。どちらも第一部だけである。私は自分が訳してしまうまで、他人の訳本を読まずにいた。

第一部も第二部も訳してしまつてから、両君の第一部の訳を読んで見た。そして両君の努力を十分に認めた。もつとも尤高橋君のは昔発表せられた時瞥見<sup>べっけん</sup>して、舞台上に上すには適していぬと云うことだけは知っていた。そう云うわけで、私は両君の影響を受けてはいない。早く出ていた高橋君の訳を参考しなかつたのも、やはり原文を素直に読んで、その時の感じを直写しようと思つていたからである。

#### 四

私は高橋君の努力をも町井君の努力をも十分に認めているが、

中にも高橋君が非常に綿密に研究せられた処のあるのを見て感心している。原文とイギリス訳とを対照せられたのは決して、徒勞ではなかつた。

## 五

私は自分の訳本ファウストについて、一度心の花に書いたことがある。その中に正誤表を作つた事や、象ぞうがん嵌で版型を改めた事を言つた。然るにその正誤表がまだ世間に行き渡つていない。そこで正誤表を作つたと云うのは虚言だと云う人がある。あれは虚言ではない。正誤表は先ず第一部のが出来て、多少世間に出てい

る。次いで第二部が出来て、これも多少世間に出ている。就<sup>なかん</sup>  
<sup>ずく</sup>中 私の手許から贈遺した本には、正誤表の出来た後、それを添  
えなかつたことはない。書肆<sup>しよし</sup>富山房も誠意がないではなかつたが、  
買った本は誰が買ったか分からぬので、正誤表の送りようがない  
と云うことであつた。帝国劇場で第一部の興行のあつた時、第一  
部の正誤表は出来ていたので、富山房はそれを劇場で配布しよう  
かとも云つた。しかし私は本を読む人と劇を観る人とは自ら別だ  
から、それは無益だろうと云つた。さて今既に印刷し畢<sup>おわ</sup>つてい  
るファウスト考には、右の第一部、第二部の正誤表を合併して、更  
に訂正を加えて添えてあるのである。

## 六

正誤表に載せてある誤には、誤植もあれば、誤写もある。原稿は私の書いたのを、筆工に写させた。それが印刷所に廻ったのである。原稿を口授して筆受させたのだと云う人があるが、そうではない。誤植や誤写の外に、誤訳がある。誤植や誤写は自分に発見し易いが、誤訳はそれがむずかしい。人に指摘して貰って知ることが多い。私は今日まで指摘して貰って、私のそれを承認した誤訳を、ここに発表しようと思う。それは指摘してくれられた人には、没すべからざる恩誼があるから、それに対して公に謝したためである。

## 七

しかし体に疵きずのある人は、衣服でそれを掩おおつていられる限は掩つている。人に衣服を剥がれるまでは露呈しない。精神上にも自家の醜は隠される間は隠している。そればかりではない。フランスの誰やらの本に、大賊が刑せられる時、人間の一番大切な秘密を語ろうと云った。人が何かと問うた。賊は「白状するな」と云ったと云うのである。これは処世法の最深刻なるものかも知れない。これに反して、人に余儀なくせられたのでなく、ことさらに自家の醜を白状した人が稀にはある。ルソオの如きがそれであ

る。しかしルソオは精神病になり掛かっていたらしい。私の誤訳を指摘してくれられた人達の指摘の形式は、よしや私がそれは承認するにしても、私にそれを発表することを余儀なくしてはいなかった。その形式が座談になっているのは、その席で礼を言えば済む。私信になっているのは、礼状を遣れば済む。公開書になっているのも、罵詈ばりがしてあれば、棄て置いても好い。あるいは棄て置くのが最紳士らしいかも知れない。また先方にも過誤がある場合には、それを捉えて罵詈の返報をすることも出来る。必ずしも自ら屈して自家の過誤だけを発表しなくても好い。然るに私はここにそれを敢てしようと思う。私は公に謝するのだと云った。それは美德である。自分の行為が美德に合うことは喜ばしくない

でもないが、私はその美德のためにのみこの挙に出づるのではない。発表した方が愉快だからである。即ち身勝手である。

## 八

第一に指摘してくれられたのは、興行の時メフィストフェレスを勤められた伊庭孝君である。第一部で、ファウストの書齋に魔除のペンタグラマンマが画いてある場所は、シユウエルレである。これはチユウルシユウエルレで敷居である。それが鴨居と訳してあつた。ダハシユウエルレと云う語もないではないがふと上の方に画いてありそうに思っただけの間違であつた。丁度これと似た

事が今一つある。それは第二部で、メフィストフェレスがファウストの旧宅に這入った時、家が震動してエストリヒから土が落ちると云うことがある。エストリヒとは床である。それが天井に使つてある。しかし土が落ちるとしてあつたので、これは私が誤らずに済んだ。

## 九

伊庭孝君が今一つ指摘してくれられたのは、第一部でグレエトヘンが花占をする時、花卉をむしる、あの花卉である。あれが原文にブレツテルとしてあつたので、私は葉と訳した。それは後に

牧野富太郎君に尋ねて知るまで、あの植物の形をはつきり想い浮べていかなかったためである。ブレットルはブルウメンブレットルだと云つて聞せてくれられたのは伊庭君である。この誤訳は牧野君の意見をも質した上で私が承認した。

## 十

第二に指摘してくれられた人は杉梅三郎君である。伊庭君の忠言は度々逢うので、座談のついでに聞いたのだが、杉君はわざわざ手紙で知らせてくれた。それは第一部の閩門りよもんの外で、娘等に物を言い掛ける一老女である。アルテと書いてある。アルテ

はアイネ・アルテである。それを複数に誤つて老人等と訳してあつた。アルテが一老女だと云うことは、どのコンメンタアルにもある。高橋君も町井君も正しく訳していられる。それを私はうっかり誤つた。苦心しなかつた結果である。私は杉君に返事を遣つて、礼を言つた。それから後に逢つた時、第二部をも細閲して貰うように頼んで置いた。

## 十一

第三に指摘してくれられた人は向軍治君である。これは新人と云う雑誌に出ている。第一部の劇場にての前戯に、道化方がアイ

ン・ブラアウエル・クナアベのいるのは劇場の利方だと云っている。この確りしっかした男は役者である。それを作者と誤って訳した。すぐその跡で、道化方が作者にブラアヴであれと云っているので、誤ったのである。イギリス訳には役者と云う語が入れているのである。どのコンメンタールにも役者とことわつてある。高橋君も町井君も正しく訳している。それを私はうっかり誤つた。そしてその誤のために、次の数句のうちにあるデンをデルと見誤つた。向君には私はまだ礼を言わずにいる。新人の書振では、私なんぞが礼を言つたつて受けられぬかも知れない。しかし兎に角ここで感謝の意だけ発表して置く。新人には別に二三の指摘がしてあつたが、それは私のここで発表しようと思つている事件の範囲外だ

と、私は認める。

## 十二

以上のうちで伊庭君の指摘せられた誤訳は、他の誤植や誤写などぞと一しよに、最初別々に印刷した第一部と第二部との正誤表に載っているが、杉君と向君との指摘せられた誤訳は両部を合併して、ファウスト考に添えるはずの正誤表にだけ載っている。私は今後幾度でも、機会を得次第に正誤して行く積であるから、あらゆる読者に尚沢山指摘がして貰いたい。そして私の苦心の足りなかつた処を補つて貰いたい。これはファウストには限らない。

先頃沼波ぬなみ武夫君は一幕物の中のサロメの誤訳を指摘してくれられた。近ちかごろ比伊庭孝君は同書の中の痴人と死との誤訳を指摘してくれられた。それ等も改版の折に訂正したく思っている。

## 十三

私は誤訳をしたのを、苦心が足りなかつたのだと云つた。そんなら私がもつと物に念を入れる性質で、もつと時間に余裕のある境遇にいたら、誤訳をしないだらうかと云うに、私はそうは思わない。人間のする事業に過誤のない事業はない。書物に誤謬のない書物はない。翻譯に誤訳のない翻譯はない。あるはずである。

それをあらせまいと努力するより外ない。私は私の性質と境遇との許す限り、この努力をしようと思う。

## 十四

ファウストは一万二千百十一句ある。その中で諸家のコンメンタルに異説のある難句が、枚挙するに違<sup>いとま</sup>あらぬ程である。然るにここに書いた四箇条の誤訳は、皆極平易な句に過ぎぬ。そうではないのは所謂<sup>いわゆる</sup>「とがき」などである。今後は難渋な句の誤訳をも、もしどこかにあつたら、発見して貰<sup>もら</sup>いたい。私は訳本ファウストを読まれる人達に、一層深い望<sup>しよく</sup>を属<sup>ぞく</sup>している。



# 青空文庫情報

底本：「ファウスト 森鷗外全集Ⅱ」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年2月22日第1刷発行

2007（平成19）年6月25日第5刷発行

入力：門田裕志

校正：米田

2012年1月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

# 不苦心談

森鷗外

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>